正しい授業という発想は胡散臭い
一様に親切にしていればいいのか
多様化と自由度が求められるべき

一歩先のあなたへ

永田 和宏

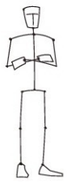
8 教師の平均化は怖い

教え方が丁寧になり、落ちこぼれに心を配り、教育力をあげる。つまり教え方のスキルの向上に、どの大学も、大学をあげて取り組んでいる。これを悪いと言ったら教師失格と言われそうである。しかし、少なくとも大学の教師は、親切すぎてはいけないのではないかと、かなり反語的ではあるが、真剣に思っている。

義務教育である中学までは、そして高校までの教育では、それは必須の要件であり、大切なことであると私も思う。しかし、大学という場は最後の教育機関である。その最後の場まで、一方的に〈与える〉という形で教育がなされていていいのだろうか、と思うのである。

「孟子」に「君子は引きて発（はな）たず」という格言があるという。弓の引き方は教えても、実際にそれを射るところまでは教えないことを言うのだそうだ。あまりにも手取り足取り、「与えすぎる」教育は、害になるだけだと、読んでおきたい。

いま、どの大学でもFD活動が活発に行われている。ファカルティ・ディベロップメント。教員が、授業内容や方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みと定義される。大学設置基準にも明記されるようになり、義務化された。いい授業をするためのセミナーや講習会が教員向けに開催され、公開授業が行われたり、学生からの評価アンケートによって授業の改善をはかろうともしている。



この取り組みに異を唱える必要はないのかもしれないが、正直なところを言えば、嫌だなあと思う。こんなことよりもっと大切なことがあるだろう、というのが正直な感想である。

大学という場は、さまざまな考え方を許容し、多くの価値観がしのぎを削りあうところである。それは思想や政治、あるいはスクール（学派）といった学問、研究の内容や考え方だけでなく、教育の場である講義においてこそ、多様化と自由度が求められるべきであろう。誰もが認める正しい理念や目的があって、みんながその実現に向けて一様に努力するような場であってはならないのではないか。

FD活動の目的と内容については一言では括（くく）れないが、そこではどの先生も、一様に学生に親切で、講義に熱心であり、わかりやすいいい授業をすることを求めているようにみえる。この「一様に」あるいは「みんな」というところが曲者（くせもの）である。見渡す限りいい先生ばかりが見えるような大学はおぞましいではないか。金太郎飴のように、どこを切っても同じような教師の顔しか見えてこないような大学に、どんな魅力があると言うのだろう。大学の面白さとは、大きくは教師の個性に依存していると思う。思いたいのである。

教師の質、授業の質を保証しようという発想は、まず講義というものは、内容を正しく伝えるべきものという点を前提として発想されている。伝えるべき内容は、誰が見ても正しいものであり、教師はそれを解りやすく、しかも正確に伝えるのが使命である、だから誰が教えても一定レベル以上のものが保証されるはずであり、べきである。私はこの部分にもっとも胡散臭（うさんくさ）さを感じるのである。

ここには多様性こそが大学の本質であるという概念が根本のところで欠落している。質保証、あるいは教員評価ということも頻（しき）りに言われているが、保証や評価というのは一定の基準に照らして行わなければ意味がない。それは大学の教育を平均化する方向へ向かわざるを得ない宿命を負っている。文部科学省はそのほうが管理しやすいであろうが、それでは大学の個性も、教師の個性も失われていくばかりである。そんな個別化に逆行しつつ、いっぽうで個性的な学生の出現を望むなど、どだい自己矛盾も甚だしいことだと言わなければならない。

葉脈

京都産業大教授（細胞生物学）、歌人

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます